

近代日本におけるモンテネグロの国名表記

——幕末・明治期を中心に

中澤拓哉

1. はじめに

(1) 問題の所在

本稿は、バルカン半島に位置する小国モンテネグロの国名が、幕末および明治期の日本においてどのように表記されてきたのかを検討するものである。

モンテネグロは、公用語のモンテネグロ語¹では「ツルナ・ゴーラ (Crna Gora)」と呼ばれる²。これは「黒い山」を意味し、山がちなこの地域を覆う深い森が、遠景では黒々と見えることに由来するとされる。近隣の諸言語や同系統のスラヴ諸語では、各言語で「黒い山 (の国)」を意味する語で呼ばれることが多い。たとえばトルコ語では「カラダー (Karadağ)」、アルバニア語では「マリ・イ・ズィ (Mali i Zi)」、ギリシャ語では「マヴロヴニオ (Μαυροβούνιο)」、ロシア語では「チェルノゴリーヤ (Черногория)」である。そしてヴェネト語の呼称「モンテネグロ (Montenegro)」³が西欧に広まったことで、歴史的にモンテネグロと関係の薄かった地域ではヴェネト語由来の表記が普及することになった⁴。

¹ かつてセルビア・クロアチア語と呼ばれていた言語は、1990年代以降にセルビア語・クロアチア語・ボスニア語・モンテネグロ語へと分裂した。これらは現在でも高い相互理解性を保っており、実務上は同一の言語と見做して差し支えない。本稿では文脈によって様々な言語名称を用いるが、それは筆者がこの地域の言語問題について特定の政治的立場に与することを意味しない。詳しくは、拙稿「言語の数えかた——旧ユーゴスラヴィア諸国におけるセルビア・クロアチア語の事例から考える」エスニック・マイノリティ研究会編『多様性を読み解くために』東京外国語大学海外事情研究所、2020年、149–156頁を参照。

² スラヴ語で「黒い山」と記された最古の記録は13世紀末に遡るが、そこでは「チェルナ・ゴーラより [от Черне Горе]」と記されている。Marijan Mašo Miljić, “Prvi pomeni Crne Gore,” *Matica* 67 (2016), str.386.

³ “Montenegro”という表記は14世紀末の古文書が初出とされるが、11世紀中葉のラテン語文書には“Monte nigro”という表記がみえる。その後も、“Montem nigrum”や“Montenigro”、“Montanea”など様々な表記が用いられ、16世紀以降に“Montenegro”という綴字が定着した。Isto, str.393–396; И. Стјепчевић и Р. Ковијанић, “Први помени Црне Горе у которским споменицима,” *Историјски записи* 6, бр.1 (1953), стр.232–233.

⁴ F[rancesco] T[ommasini], “Montenegro,” in *Enciclopedia Italiana di scienze, lettere ed arti*, vol.23 (Roma, 1934), p.744; スティーヴン・クリソルド編 (田中一生ほか訳) 『ケンブリッジ版ユーゴスラヴィア史 [増補版]』恒文社、1993年、86頁。

しかし日本では、西欧由来の「モンテネグロ」という音訳表記のみならず、「黒山国」という意識表記や、「ツルナゴラ」という現地音に基づく音訳表記も用いられてきた。モンテネグロの国名表記は、現地語の意識表記、現地音に基づく音訳表記、そして現地語ではない西欧諸語に基づく音訳表記、という、まったく異なるが妥当性の高い3系統の表記が用いられてきたという点で、外国地名の日本語表記の歴史において非常に興味深い例である。だが後述するように、その変遷の歴史について十分な検討がなされているとは言い難く、不正確な記述がなされている文献もある。

本稿は、モンテネグロの国名表記の歴史のうち、特に幕末・明治期に焦点を合わせ、その変遷を検討することで、日本のモンテネグロ像研究のための基礎作業とし、また外来固有名詞表記の研究に対して新しい事例を提供することを目的とする。

(2) 先行研究

これまで、東欧史の観点から日本とモンテネグロの交流史を扱った研究⁵や、モンテネグロを含むバルカン地域一般に関する日本側の認識を論じた文献⁶はあるものの、日本におけるモンテネグロ像を単体で扱った研究は未だ存在せず、ましてや同国の国名表記について歴史的な表記とその変遷を検討した研究はほとんどない⁷。その数少ない文献の一つでは、モンテネグロが『黒

⁵ 日本とモンテネグロの交流史に関する先行研究として、田中一生と山崎洋「解説」ペタル2世ペトロビッチ=ニェゴシュ（田中と山崎訳）『山の花環——十七世紀末の歴史的事件』ニェゴシュ財団、2003年、9-13頁；三谷恵子「セルビア、モンテネグロと日本」中欧・東欧文化事典編集委員会編『中欧・東欧文化事典』丸善出版、2021年、684-685頁；拙稿「日本・モンテネグロ関係の濫觴——幕末および明治期における外交と言説」『アジア地域文化研究』17号、2021年、23-50頁が挙げられる。他には、日本・ユーゴスラヴィア交流史の枠内でモンテネグロとの交流について論じられている。田中一生「日本=ユーゴスラヴィア文化交流の歴史と現状」『日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究——1981年9月国際シンポジウムの報告集』東欧史研究会、1982年、127-132頁（田中の研究は、のちに彼の著書『バルカンの心——ユーゴスラヴィアと私』彩流社、2007年、37-46、82-85頁に再録された）。

⁶ 寺島憲治「日本・バルカン交流史——日清戦争以前」『日本と東欧諸国』182-185頁；柴理子「江戸時代の『東欧』イメージ——蘭学書と新聞報道を手がかりに」『東京情報大学研究論集』10巻2号、2007年、30-48頁；同「明治期の新聞報道に見るバルカン・イメージに関する一考察」『東京国際大学論叢 国際関係学部編』16号、2010年、83-99頁；Shiba Riko, “Images of the Balkans in the Japanese Media of the Meiji Period,” *Godišnjak za društvenu istoriju* 18, no.3 (2011), pp.7-16.

⁷ 寺島憲治や柴理子の研究は、幕末・明治期におけるモンテネグロへの言及を発見した点で重要だが、表記の差異には注意を払っていない。寺島「日本・バルカン交流史」182-183頁；柴「江戸時代の『東欧』イメージ」45頁；同「明治期の新聞報道」85-87頁；Shiba, “Images of the Balkans,” p.9. 日本における他の旧ユーゴスラヴィア圏の地名表記についての検討として、Kanazaši Kuroda Kumiko, “K zgodovini poznavanja Slovenije, slovenske kulture in slovenskega jezika na Japonskem,” *Slavistična revija* 50, št.1 (2002), str.145; 拙稿“Istočno pitanje kroz dalekoistočne oči: Japanski pogledi na

山国』と国名を直訳した形で明治の外交史に現れるようになる」⁸と述べられているが、これは本稿で詳しく検討するよういささか不正確な理解である。

他方、近代日本の外国地名表記については、国語学や地理学といった分野で研究されてきた。それらの先行研究によれば、幕末・明治期には新聞の速報性が重んじられたため表記の不統一とカタカナ表記の増加が生じ⁹、また外国地名のうち頻出するものには漢字が、そうでないものにはカタカナが用いられる傾向があった¹⁰。明治初期にも、関心が低かったり馴染みが薄かったりする地名にはカタカナが、よく知られていたり馴染みがあったりする地名には漢字が用いられている¹¹。また明治初期には外国地名表記の英語化が進行し¹²、たとえば地図帳では「かつて[……]現地語で呼称された国についてさえ、英語による呼称に切り替えられた」¹³のだという。

これらの研究では、モンテネグロには触れられないか、あるいは触れられたとしても孤立的に見出される表記例に言及するにとどまり¹⁴、通時的な表記の変遷は研究されていない。近年、主要な外国地名に着目して通時的に表記の変遷を検討した研究が出版されたが¹⁵、当然ながらモ

ustanke u Hercegovini (1861–1878),” *Prilozi* 50 (2021), str.79–83; 同「明治・大正期の外国地名表記を訪ねて」『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』162号、2021年、18–19頁がある。

⁸ 三谷「セルビア、モンテネグロと日本」684頁。

⁹ 西浦英之「幕末・明治初期の新聞にあらわれた外国名称呼・表記について」『皇学館大学紀要』9号、1971年、192–193頁。

¹⁰ 佐伯哲夫「官板バタバヤ新聞における外国地名表記」『関西大学文学論集』36号、1986年、145–173頁；湯浅彩央「『航米日録』の外国地名表記」『立命館文学』630号、2013年、296–298頁。

¹¹ 上野力「明治初期の外国地名表記」『常葉学園短期大学紀要』13号、1981年、27–30頁。それらの漢字表記には、漢語からの借用と日本独自のものが混在していた。金敬鎬「日・韓・中における外国地名の漢字音訳表記——近代の文献を中心として」『専修国文』65号、1999年、21–25頁。江戸期から明治初期の外国地名表記への漢語文献の影響については、西浦英之「近世に於ける外国地名称呼について」『皇学館大学紀要』8号、1970年、284–291頁；水持邦雄「明治初期における外国地名の漢字表記について」『金沢大学語学・文学研究』19号、1990年、7–10頁も参照。

¹² 田野村忠温「ドイツ国名『独逸』成立の過程とその背景——社会的条件と日本語における音訳語の特異性」『東アジア文化交渉研究』13号、2020年、71頁。

¹³ 西脇保幸「明治期以降における外国国名の呼称変遷について——主に地図帳を事例として」『新地理』42巻4号、1995年、9頁。

¹⁴ 佐伯「官板バタバヤ新聞における外国地名」151頁；山本彩加「近代日本語における外国地名の漢字表記——明治・大正期の新聞を資料として」『千葉大学日本文化論叢』10号、2009年、95頁。

¹⁵ 横田きよ子『外国地名受容史の国語学的研究』和泉書院、2019年。

ところで、同書ではロシア関係の記述に些か問題があるため、ここで指摘しておく。まず、「Европа」や「Италия」、「Россия ラスィーヤ」(同、29, 53, 109頁)のようにロシア語の綴りを間違えている箇所が散見される(正しくは、それぞれ Европа, Италия, Россия)。

これらは些末な誤りだが、著者がロシア語に通じていないことによって非合理的な推論がなされている点は看過しがたい。横田は「ロシヤ」というカタカナ表記について、「語頭を『ロ』とするの

ンテネグロについては触れられていない。

上述のような研究状況を踏まえ、本稿では、幕末・明治期におけるモンテネグロの地名表記をめぐる試行錯誤の過程の一端を明らかにしたい。それによって先行研究の欠缺を埋めるだけでなく、外国地名表記の研究に対してささやかな貢献をなしたいと考える。

2. 幕末の国名表記

モンテネグロは1878(明治11)年のベルリン条約によって独立が認められた国であり、江戸時代には未だ独立国ではなかったが、東方問題で存在感を示していたため、その名は国際的な報道や世界情勢の解説などに登場していた。したがって幕末期に西洋の地理書や報道が日本に紹介されると、モンテネグロの名が初めて日本の文献に登場することになる¹⁶。

地理書を見てみると、英国の宣教師ウィリアム・ミュアヘッド(William Muirhead、慕維廉)が1853(咸豊3)年に上海で刊行し、儒学者しおのやとういん塩谷宕陰が訓点を施して1859(安政6)年に出版した『地理全志』には、「蒙的尼」への言及がある¹⁷。これは、管見の限り日本で記された最も古

は、日本での『魯』『露』の漢字音が影響している可能性が高い(同、112頁)と書いているが、**Россия**を綴り通りに読み下せば「ロシヤ」になるという至極単純な理由が考慮されていない。確かに現代標準ロシア語の発音では著者が示す通り「ラシーヤ」となるのだが、それは標準ロシア語で強勢が置かれぬ母音 *o* は *a* のように発音されるという発音上の規則(アーカニエ)があるためであり、綴りの上ではあくまでも「ロシヤ」なのである。

つまり、「ロシヤ」という表記は当時の日本人がキリル文字の綴りに忠実にカナ表記し、そしてその表記に基づいて「ロ」の音を持つ漢字が選ばれたという可能性が大きいにもかかわらず、横田は漢字表記がカナ表記に影響したという逆の因果関係を想定している。この説は受け入れがたい。

¹⁶ 拙稿「日本・モンテネグロ関係の濫觴」24-25頁。

モンテネグロへの言及に関して、拙稿での調査に加えて、以下の事実を指摘しておきたい。1671(寛文11)年の地図『万国総図』には、アルバニアやモルダヴィアといった地名がみえるものの、当然ながらモンテネグロへの言及はない。また、先行研究が1833(天保4)年以前に成立したと指摘する『地学示蒙』には、現モンテネグロ領のコトル(Kotor)にあたる「カッタロ」への言及はあるものの、モンテネグロへの言及はない(コトルは当時ハブスブルク君主国領)。『萬國総圖』林次左衛門、1671年；青地林宗訳『地学示蒙』写本、書誌情報なし(国立国会図書館寄別14-24)、国立国会図書館デジタルコレクション版(DOI: 10.11501/2542970)、51画像目；Elke Papelitzky, “A Description and Analysis of the Japanese World Map *Bankoku sōzu* in Its Version of 1671 and Some Thoughts on the Sources of the Original *Bankoku sōzu*,” *Journal of Asian History* 48, no.1 (2014), pp.37-38; 櫻井豪人『『オーストラリア』の『蒙』系音訳表記について』『人文社会科学論集』1号、2022年、27頁。

なお、筆者が参照した『地学示蒙』の国立国会図書館所蔵写本には、末尾に「西暦千八百二十年鏤板」とあり、その横に朱で「天保丙申十一月」に校了したと記されている(83画像目)。この記述を信じるならば、本書は1820(文政3)年に出版され、国立国会図書館所蔵の写本は天保丙申、すなわち1836(天保7)年に成立したということになる。

¹⁷ 慕維廉『地理全志上 第二編』山城屋佐兵衛、1859年、30丁ウ。『地理全志』とその表記については邹振环『晚清西方地理学在中国——以1815至1911年西方地理学译著的传播与影响为中心』上海古

いモンテネグロの国名表記である。

新聞における最初期のモンテネグロへの言及は、文久年間に蕃書調所が蘭領東インドのオランダ語紙『ジャワ新聞 (Javasche Courant)』から抄訳して発行していた『官板バタビヤ新聞』および『官板海外新聞』に掲載されたものであった¹⁸。これらの紙面では「蒙^{モンテグレネー}的^ニ」「モンテ子グレー」「モンテ子グレイ」「モンテ子ゴロー」「モンテ子グレ」といった表記がみられる¹⁹。

『官板バタビヤ新聞』の表記で注目すべきは、モンテネグロの漢字表記「蒙的尼」が『地理全志』の表記と同一であることだ。直接的根拠には欠けるが、おそらくこれは『地理全志』を参照した可能性が高い。同じ頁でヘルツェゴヴィナが『地理全志』と同じく「墨西^{ヘルセゴイナ}罈」と表記されているのがその傍証である²⁰。ヘルツェゴヴィナの漢字表記と同時に、モンテネグロの漢字表記も漢語から導入されたのだと思われる。

ここまでの検討から、日本語で初めてバルカン情勢が紹介されはじめた時点で、モンテネグロは現地語ではなく西欧の呼称に基づいて紹介されていたことがわかる。そしてその西欧の呼称も、当初は漢語を経由した漢字音訳表記であった。だがオランダ語から翻訳する過程で、仮名文字によって表記されるようになったのである。

3. 明治期の国名表記

明治期のモンテネグロの国名表記は、基本的に幕末のそれと同じく西欧語の Montenegro に基づき、それを漢字表記するかカタカナ表記するかという点で大きな差異が生じていたほか、それぞれの表記の内部でも表記の多様性がみられた。

(1) 漢字表記

まずは漢字表記について見てみたい。漢字表記は、上で検討した『地理全志』における「蒙的尼」の流れを汲むものと、それ以外の表記とに分けられる。

最初に、「蒙的尼」あるいはそれに類する表記を検討したい。前述のように、安政年間に刊行された地理書『地理全志』には「蒙的尼」という国名表記がみられるが、同書が 1874 (明治 7)

籍出版社、2000 年、90-104 頁；千葉謙悟『中国語における東西言語文化交流——近代翻訳語の創造と伝播』三省堂、2010 年、71-103 頁；沈和「近代中国語におけるヨーロッパ地名の変遷——『察世俗毎月統計伝』と『地理全志』を中心に」『文化交渉』8 号、2018 年、146-153 頁も参照。

¹⁸ 柴「江戸時代の『東欧』イメージ」45 頁；Shiba, “Images of the Balkans,” p.9.

¹⁹ 『官板バタビヤ新聞 五』老皂館、1862 年、巻 12、5 丁オ；『官板海外新聞』老皂館、1862 年、巻 16、5 丁ウ-6 丁オ；巻 21、2 丁ウ-3 丁オ；巻 22、9 丁オ；巻 23、10 丁ウ。後代の復刻版では変体仮名が修正されている。『明治文化全集 第 4 巻 新聞篇』第 3 版、日本評論社、1968 年、131、151 頁。これらの表記で、語末が「ロ」ではなく「レ」や「レー」のようにになっている理由は不明である。

²⁰ ヘルツェゴヴィナの漢字表記が漢語由来のものであることについては、拙稿“*Istočno pitanje kroz dalekoistočne oči,*” str.82 で論じたとおりである。なお『地理全志』には振り仮名がなく「墨西罈」とのみ書かれている。慕維簾『地理全志^上 第二^{歐羅巴志}』30 丁ウ。

年に訓読を施して再版された際、モンテネグロの漢字表記には「蒙^{モンテネーグロ}的尼」と振り仮名が振られた²¹。そしてこの漢字表記は明治期の複数の文献によって採用されたが、それらの表記は漢字こそ共通していたものの²²、どのような振り仮名を当てるかについては多様性があった(表1)。

表1. 『地理全志』と同一の漢字表記

表記	出典
モンテネグロ 蒙的尼	内田正雄編『輿地誌略 七篇』 ²³ 文部省、1871年、70頁。
モンテコグロ 蒙的尼 ²⁴	關息定と飯尾朋央『萬國地名字類 一名 輿地誌略字引』上、田原文明堂、1875年、42頁。
蒙的尼	『萬國年鑑 上編』大藏省統計課、1880年、905頁。
モンテネグロ 蒙的尼	岡田好成と内村邦藏訳『萬國形勢総覽 全』弘道書院、1885年、371頁。
モンテネグロ 蒙的尼	岡野熊太郎訳『萬國商業地理教科書』有隣堂、1889年、90頁；高木怡荘『訂正外國地理 全』奎文堂、1890年、289頁。
モンネグロ 蒙的尼	荻原民吉訳『萬國政治年鑑 全』大成館、1889年、259頁。

なお、「蒙的尼古羅」²⁵や「蒙^{モンテネーグロ}的尼古羅」²⁶、「蒙的尼羅」²⁷、「蒙^{モンテネーグロ}的尼粵羅」²⁸といった具合に、「蒙的尼」の後ろに漢字を付け加えた表記も散見された。これは推測だが、「蒙的尼」という漢字表記からは「モンテネグロ」という名称のうち「グロ」の部分が読み取れないため、それに相

²¹ 慕維簾『増訂和譯地理全志^{上編}四』雁金屋清吉、1874年、5丁オ。

²² なお、官庁の一部には「蒙得尼」と表記する向きもあった。国立公文書館、職 A0047100、職員録・明治十八年五月・外国人叙勲録 (JACAR Ref. A09054365000)、113-114 画像目；国立公文書館、職 A00638100、職員録・明治二十一年一月・勲位録改 (JACAR Ref. A09054397400)、8 画像目。

²³ 『輿地誌略』の地名表記は、細井将右『『輿地誌略』中の地図と外国地名』『地図』28巻2号、1990年、19-25頁が論じているが、モンテネグロには触れていない。

²⁴ 振り仮名が「モンテコグロ」となっているのは、おそらく、「ネ」を表す「子」を「コ」と読み間違えたものであろう。

²⁵ 国立公文書館、類 00428100、蒙的尼古羅国ト別配達郵便ヲ交換ス (JACAR Ref. A15111841300)；国立公文書館、類 00428100、水液脂肪類見本ヲ交換シ得ル国名中蒙的尼古羅ヲ追加ス (URL: <https://www.digital.archives.go.jp/img/pdf/1696233>)、1 画像目。

²⁶ 「告示」『官報』1882号、明治22年10月5日、49頁。

²⁷ 国立公文書館、任 A00258100、陸軍歩兵少佐福島安正土耳其希臘布爾牙利蒙的尼羅巴威里五箇国勲章受領及佩用允許ノ件 (URL: <https://www.digital.archives.go.jp/img/pdf/2537984>)、1 画像目。

²⁸ 田付直男口述『地理學講義 卷之三』昌榮社、1895年、16頁。

当する漢字を新たに当て嵌めたのであろう²⁹。

続いてそれ以外の表記をみてみたい。1874(明治7)年の森有禮もりありのりの論説では「門抵尼刻羅」³⁰、明治15年の『万国政典』では「猛得尼刻羅」³¹、明治21年の柴四朗(東海散士)の論説では「猛抵濤苦牢」³²とそれぞれ表記された。そして柴の政治小説『佳人之奇遇』では、「門底寧克郎」³³という字が当てられて「門人」「門兵」のように略されている³³。これらの表記は一瞥してわかるように規則性を持っておらず、どの漢字を当てるかは書いた者次第であった。mo音を表すのに「猛」という漢字が選ばれることがあったのは、モンテネグロ人の「勇猛さ」を強調する意図があったからかもしれない。実際に、柴が論説や小説でモンテネグロ人の勇猛さを賞讃するなど、モンテネグロ人が「尚武の民」であるという認識は明治期の日本にも存在しており³⁴、そのような認識が漢字の選択に影響したと考えられる³⁵。

モンテネグロの国名表記を考える上で、スイスの国際法学者ヨハン・ブルンチュリ(Johann Kaspar Bluntschli)の著書は注目に値する。彼の国際法に関するドイツ語の著書は、フランス語を経由して『公法会通』として漢訳され³⁶、1881(明治14)年に訓点を付して日本で出版された。この中で、モンテネグロは「孟徳内格」と表記されたのだが、さらに「孟徳内格、譯即黒山」として、その国名が「黒い山」を意味することが注記されている³⁷。これは、管見の限りでは日本ではじめてモンテネグロを「黒山」と表記した例である。ただしこれはあくまで語義の説明であり、国名表記として用いられたものではない。

ここからわかるように、「モンテネグロ」が漢字で当て字される場合、どの文字を当てるかに

²⁹ 語末の-roに「羅」の字が当てられることが多いのは、現代日本語の音読みが「ら」であることを考えると些か奇妙だが、江戸期の蘭学者大槻玄沢おおつきげんたくが中国語南方音の影響を受けてro音に「羅」を当てるという方針を採っていたことと何らかの関係があるのかもしれない。大槻の方針については、徐克偉『厚生新編』にみる蘭学音訳語とその漢字選択』『或問』29号、2016年、94頁を参照。

³⁰ 森有禮「獨立國權義」『明六雑誌』7号、1874年、1丁ウ。なお、後代の校訂版では原文にない振り仮名が振られている。山室信一と中野目徹校注『明六雑誌(上)』岩波文庫、1999年、243頁。

³¹ 中山克己纂譯『萬國政典』岡島宝玉堂、1882年、134頁。

³² 東海散士「答客難」『日本人』5号、1888年、35頁。

³³ 同『佳人之奇遇 卷十三』博文堂、1897年、10頁。

³⁴ 拙稿「日本・モンテネグロ関係の濫觴」32-36頁。

³⁵ 音訳地名における漢字の表意性については、アンナ・シャルコ「音訳地名の表記における漢字の表意性について——ロシアの国名漢字表記を例として」『早稲田日本語研究』25号、2016年、29-42頁；同「日本における『ウラジオストク』の漢字表記」日本近代語研究会編『論究日本近代語 第1集』勉誠出版、2020年、143-158頁；同「日本語の表記体系における漢字の機能——外国地名・人名の表記を中心として」早稲田大学提出博士論文、2021年、126-129頁も参照。

³⁶ 岡本隆司「宗主権と国際法と翻訳——『東方問題』から『朝鮮問題』へ」同編『宗主権の世界史——東西アジアの近代と翻訳概念』名古屋大学出版会、2014年、104-107頁。

³⁷ 歩倫(丁躰良訳、岸田吟香訓点)『公瀆會通 卷一』樂善堂、1881年、24頁。

ついて規範が存在するわけではなかった（漢訳洋書の表記揺れから、同時代の漢語においても定まった漢字表記が不在であったことが窺える）³⁸。柴四朗の事例を見れば、同一人物の中でも表記は定まっていなかったことが見て取れよう。

(2) カタカナ表記

続いてカタカナ表記を検討する。まず 1875（明治 8）年のヘルツェゴヴィナでの蜂起勃発から 1878 年のベルリン条約での国際的な独立承認に至るまでの新聞の表記をみると³⁹、「モンテ子グロ」表記が主流だが、他にも様々な表記が存在したことがわかる（表 2）。

表 2. 1875～1878 年の新聞の国名表記

表記	掲載紙・日付
<u>モント子グロー</u>	『東京日日新聞』 1875/9/9
<u>モート、ニエグロ</u>	『東京日日新聞』 1875/10/28
<u>モントニエグロー</u>	『東京日日新聞』 1875/10/28
<u>モントニエグロ</u>	『東京日日新聞』 1875/11/7; 11/8
<u>モンテニエグロ</u>	『東京日日新聞』 1875/11/7
モンテ子グロ ⁴⁰	『讀賣新聞』 1876/7/26; 8/5; 8/7; 9/1; 9/6; 9/20; 11/13; 11/15; 1877/4/6; 4/14; 12/13; 1878/6/18; 『東京日日新聞』 1876/10/12; 1877/1/11; 4/30; 5/11; 5/12; 5/14; 5/21; 『海南新聞』 1877/5/25; 『郵便報知新聞』 1878/4/25; 4/26; 5/29; 5/30; 6/18; 7/17; 8/13
モンテニグロ	『東京日日新聞』 1877/4/27
<u>モント子グロ</u>	『郵便報知新聞』 1878/3/30
<u>モンテ子グロー</u>	『郵便報知新聞』 1878/4/26
<u>モンテ子グリーン</u> ⁴¹	『郵便報知新聞』 1878/8/23

³⁸ 現代漢語圏では、中華人民共和国において「黒山」、中華民国（台湾）において「蒙特内哥羅」という表記が、それぞれ用いられている。

³⁹ この時期のバルカン情勢に関する報道については、拙稿「日本・モンテネグロ関係の濫觴」25-27 頁；同“*Istočno pitanje kroz dalekoistočne oči,*” str.85-91 を参照。

⁴⁰ 傍線の有無は区別していない。なお「モンテ子グロ」という表記もあったが、これは写植の誤りであろう。『東京日日新聞』 1877 年 1 月 10 日、19 頁。

⁴¹ この箇所は「勇敢ナルモンテ子グリーン」となっているので、おそらく原文では **brave Montenegrins** のように「モンテネグロ人」を意味する **Montenegrin** の語が用いられており、それをそのまま日本語に写してこのような表記になったのだろうと推測する。

モンテグリン ⁴²	『郵便報知新聞』1878/9/9
----------------------	------------------

ベルリン条約後、日本政府はモンテネグロと外交的接触を持つようになった。1882(明治15)年9月17日には、有栖川宮熾仁親王ありすがわのみやたるひととモンテネグロ公ニコラ1世とが会談している⁴³。外交文書、および政治家や軍人の書簡や著作における表記を見てみると、こちらも「モンテネグロ」に類した表記が主流であるといえるだろう(表3)。

表3. 外交官や政治家、軍人による表記

表記	出典
モント子グロ	中井弘『土耳其希臘埃及印度漫遊記程 中巻』中井弘、1878年、10頁；国立公文書館、類00097100、有栖川熾仁親王魯国滞在中ノ景況稟告(JACAR Ref: A15110455800)、3画像目。
モント子クロ	国立公文書館、類00097100、有栖川熾仁親王魯国滞在中ノ景況稟告(JACAR Ref: A15110455800)、1画像目。
モンテネグロ ⁴⁴	国立公文書館、類00087100、外務省有栖川熾仁親王欧洲巡歴中各国帝王ヨリ受領勲章ノ名号員数等稟告(JACAR Ref: A15110403500)、2画像目；国立公文書館、類00087100、二品熾仁親王露、奥、蘭、狩、白、西、モンテネグロ国等ノ勲章佩用允許(JACAR Ref: A15110403600)、1画像目；国立公文書館、纂00552100、モンテネグロ国ハ曩ニ万国平和会議ニ於テ議決シタル三条約及三宣言書ニ関スル批准書ヲ和蘭国政府へ寄託シタル旨在本邦蘭国公使ヨリ通知ノ件・二通(URL: https://www.digital.archives.go.jp/img.pdf/2411575)、1-7画像目；国立公文書館、昭47郵政00204100、本邦ト外国郵便為替及電信為替ヲ交換スル国名等ヲ示ス表中追加ノ件(JACAR Ref: A09050810400)；国立公文書館、昭47郵政00204100、本邦ト外国郵便為替及電信為替ヲ交換スル国名等ヲ示ス表中改正ノ件(JACAR Ref: A09050813000; A09050815600)。

⁴² この箇所は「モンテグリンノ國境」と続くため、おそらく原文では Montenegrin border のように Montenegro の形容詞形 Montenegrin が用いられており、それをそのまま日本語に写す際に誤って「ネ」が脱落してこのような表記になったのだろうと推測する。

⁴³ これは歴史上初めての日本・モンテネグロ両国間の外交的接触である。詳しくは、拙稿「日本・モンテネグロ関係の濫觴」28-29頁を参照。

⁴⁴ 昭和期に公刊された熾仁親王の日記には「モンテネグロ」と書かれているが、校訂を経て変体仮名が改められており、元々は違う表記だった可能性もある(筆者は原本を確認していない)。『熾仁親王日記 巻四』高松宮家、1936年、77-78頁。

モンテ子グロ	国立公文書館、纂 00007100、特命全権公使花房義質報告東ルーメリヤ変革ノ件 (URL: https://www.digital.archives.go.jp/img/2481783)、8 画像目 ⁴⁵ 。
モンテニコロー	春畝公追頌會編『伊藤博文傳 中巻』原書房、1970 年、338 頁。
モンテネグロ	西村時彦編『單騎遠征録』(福島安正校閲) 金川書店、1894 年、1 頁。

さらに、世界情勢に関する書物を見てみても、「モンテネグロ」およびそれに類した表記の用例が多かった(表4)。

表4. 明治期の地理や歴史、世界情勢に関する書物における国名表記

表記	出典
モント子グロー	石光穎太郎編『萬國度量衡要集 全一一附曆年制數理上由來及磁石話』糟谷佐右衛門、1891 年、30 頁。
<u>モンテ子グロー</u>	中村五六編『中等地理 萬國誌』文學社、1892 年、目次, 121, 195 頁。
<u>モンテ子グロ</u> (Montenegro)	
<u>モンテ子グロー</u>	
モンテ子グロー侯國即ちエルナ ゴラ ⁴⁶	『地學雜誌』9 卷 9 号、1897 年、443 頁。
モンテ子グロ	山上萬次郎編述『新撰大地誌前篇(世界之部卷之二) 第二冊』富山房、1898 年、909 頁；矢津昌永『中地理學外國誌』丸善、1899 年、290 頁；武田櫻桃四郎編『新撰世界地理問答』博文館、1902 年、179 頁；有賀長雄講述『近時政治史 完』東京專門學校、出版年不明(国立国会図書館 62-384)、463 頁。
モンテ子グロ ⁴⁷	岩崎重三編『新式萬國地理』内田老鶴圃、1899 年、194 頁。

⁴⁵ この史料に関しては、Svetlana Maltseva 「駐露時代(1883-1886)の花房義質」大阪大学提出博士論文、2009 年、227 頁の翻刻も参照した。

⁴⁶ 「エルナゴラ」という表記は、C や Z を E と見間違えたものと推察される。

⁴⁷ 同書では、バルカンやブルガリアも「バルカン」「ブルガリア」のように小さな文字を交えて書かれている。

モンテネグロ	矢津昌永監修『新編中學地理 ^{外國誌} 下巻』集英堂、1899年、14頁； 學海指針社編『小學地理卷三萬國地理教員用』集英堂、1901年、 112頁；高桑駒吉『新撰中等西洋史』大日本圖書、1904年、281 頁；木村鷹太郎『 ^{増補} _{改訂} 萬國史』尚友館、1905年、329頁 ⁴⁸ ；有朋堂 編『地理學綱要 外國之部』有朋堂、1905年、53頁；巖谷小波 と金子紫草『少年世界物語 ^{第三} _巻 世界の陸軍』博文館、1909年、106 頁；壁口保興『内外地誌外國之部 地名索引』早稲田大學出版部、 1910年、1074頁。
モンテ子グロ	有賀長雄講述『近時政治史 完』東京専門學校、出版年不明(国 立国会図書館 62-384)、10頁。

ここまでの検討から、Montenegroのカナ表記には2種類の表記揺れが存在したことがわかる。

第1が、Montenegroという綴りを機械的にカナ転写して「モンテネグロ」とするか、teを「ト」、neを「ニ」のように転写して「モントネグロ」や「モンテニグロ」のようにするかという表記揺れである。後者のような表記は、おそらく英語話者あるいはフランス語話者の発音を聞き取ってそれに忠実に転写したものであろうと推測される。最終的には原綴に忠実な前者の表記が後者を駆逐し、teは「テ」と、neは「ネ」と表記されるようになった。

第2に、neに「ネ」を当てるか「子」を当てるかという表記揺れである。この背景には、仮名文字の字体をめぐる混乱が存在した。19世紀以前には仮名文字の字体に複数の種類が存在しており、1900(明治33)年1月に帝国教育会仮名調査委員が仮名の種類制限を試みるが、この時「ね」のカタカナ字体は「子」とされていた。ところが同年8月の文部省令第14号小学校令施行規則第16条によって、「ね」のカタカナは「ネ」とされる⁴⁹。今野真二は、これによって「明治40年頃から大正初期にかけての間に、仮名字体の統一は[……]かなり進んだことが予想される」⁵⁰と述べるが、実際、「モンテ子グロ」表記が見出だせるのは大正期までであり、それ以降は「モンテネグロ」表記が優勢になった(大正期の表記については別稿で議論する)。

さらにこの時期には、「モンテネグロ」の語源を紹介する書物も出ていた。1889(明治22)年に出版された『近世万国地誌』という本には、次のようにある。

モンテ子グロトハ伊太利語ニシテ元來ノ名稱ツツエルナゴラ及ヒ土耳其ノ「カラダー」ヲ
譯セシモノナリ此三語ハ黒山ヲ意味シ而シテ此國ハ松柏樅等ノ暗林鬱蒼トシテ殆ント全土

⁴⁸ 同頁の欄外に注として「Montenegro (Tchernagora [Slav])」と書かれている。

⁴⁹ 今野真二『正書法のない日本語』岩波書店、2013年、152-153、159-160頁。

⁵⁰ 今野真二『百年前の日本語——書きことばが揺れた時代』岩波新書、2012年、131頁。

ヲ蔽ヘルヲ以テ其名恰モ能ク此國ヲ解釋セリト云フ可シ [……] ⁵¹

このように、「モンテネグロ」がイタリア語の呼称であり、現地語では「ツルナゴーラ」、トルコ語では「カラダー」と呼び、いずれも「黒い山」の意だと説明されている。しかし語源と現地名への認識があったとしても、あくまでも国名は「モンテネグロ」と表記されていたのだ。

(3) ひらがな・ラテン文字表記

「モンテネグロ」の表記にあたっては、カタカナではなくひらがなが用いられることもあった。たとえば1892(明治25)年の『新体万国小地理学』は、「もんでねぐろ (Montenegro)」⁵²とひらがな表記して原綴を添えている。1902(明治35)年の『新撰世界地理問答』は「もんでねぐろー」⁵³と表記した。

さらに漢字や仮名文字ではなく、ラテン文字表記がそのまま用いられた事例もある。1894(明治27)年に発行された陸軍幼年学校の教本『万国歴史』では、英語・ドイツ語・フランス語を参考にして「Montenegro」と表記されている⁵⁴。当時の陸軍士官学校で用いられた教本のなかには、西欧の地名・人名を仮名文字に直さずラテン文字のまま表記したものが存在しており⁵⁵、陸軍内部ではラテン文字のままの外国地名表記が通用していたようである。

(4) ロシア語に通じた知識人の表記

ここまで、モンテネグロを Montenegro と呼称する西欧の諸言語からの翻訳の事例を検討してきたが、明治期には多くの知識人がロシア語を学んだことを考えると、ロシア語 Черногория からの影響はなかったのだろうかという疑問が湧いてくる。ここではそのような知識人の一例として、^{ふたばていしめい}二葉亭四迷による表記を検討したい。1908(明治41)年10月、ロシア滞在中の二葉亭の日記を見てみよう。

重大ナル使命／モンテネグロ特使入京

25/x Черногория 上院議員 Miushkowitz⁵⁶／外相と会見の為今廿三日入京 [……]

⁵¹ 伴山三郎『近世萬國地誌』博文館、1889年、188-189頁。

⁵² 同書では、他のバルカン諸国も「ぼるがりあ (Bulgaria) せるびあ (Servia)」のようにひらがなで書かれた後に原綴が示される。長濱兼吉纂譯『新體萬國小地理學』精英堂と日進堂、1892年、109頁。

⁵³ 普通學研究會編『新撰世界地理問答』長嶋文昌堂、1902年、90-91頁。

⁵⁴ 『萬國歴史^{近世史ノ部}卷四』陸軍幼年學校、1894年、76-77頁。なお、一箇所「Montengro」と誤記されている。本書が英独仏の3言語を参考に行っていることは、セルビアを「Servic」「Servien」「Servia」、キプロスを「Cypre」「Cypem」「Cyprus」と三通りに表記していることから知れる。

⁵⁵ 源昌久「陸軍士官学校における科目『兵要地学』に関する一研究——明治期を中心に」『淑徳大学研究紀要(総合福祉学部・コミュニティ政策学部)』46号、2012年、77-79頁。

⁵⁶ ラザル・ミュシュコヴィチ (Lazar Mijušković) のこと。28日の「Мнушков」も彼を指す。彼の出

モンテネグロ特使接見

28/x Montenegro 特使 Миушков／外相代 Чарыков 訪問 Monte は／露国か列国会議に於て飽迄強硬ノ／意見を執るか今直ちに進んで干涉／するか又は総て自然の成行に任せ⁵⁷

ここで二葉亭は「モンテネグロ」と書いた直後に「Черногория」と書き、別の日には「Montenegro」と書いて「Monte」と略している。これは当時、ロシア語を解し Черногория というロシア語表記を(おそらくはロシアの報道に触れて)知っている知識人にとっても、国名表記として「モンテネグロ」が定着していたことを窺わせる。事実、二葉亭の日記のうち、本稿で利用した部分に限れば、「Черногория」より「Montenegro」と記されている箇所の方が多いためである⁵⁸。

4. 「外国地名及人名書き方及称え方調査表」(1902年)

当時の文部省は、外国地名の日本語表記の不統一を問題視し、外国固有名詞表記に統一的指針を与えようと計画していた。1902(明治35)年、坪井久馬三ら^{つばいくめぞう}6名の歴史学者・地理学者が「外国地名及人名の称え方書き方取調」委員に任命される。同年中に彼らの調査結果は『官報』などに掲載され広く知られたが、法的強制力は存在しなかった⁵⁹。以下では、文部省による調査結果を検討し、明治末期に「モンテネグロ」が慣用表記として確立していたことを指摘したい。

坪井らが作成した「外国地名及人名書き方及称え方調査表」(以下「調査表」)では、凡例で「外國ノ地名及人名ノ稱へ方ハ[……]成ルベク其ノ國ノ稱へ方ニ據ル」「外國ノ地名及人名ニシテ我國ニ於テ襲用シタル稱へ方アルトキハ成ルベク變更ヲ加ヘズ」「原名又ハ別名ノ顯著ナルモノハ参照トシテ括弧ヲ畫シテ之ヲ附載ス」⁶⁰とされた上で、モンテネグロの表記は「Montenegro (Tsrnagora) モンテネグロ」⁶¹となっている。

ここでは、「(Tsrnagora)」と附記されていることに着目したい。「調査表」の凡例には「ロシア

立については、当時のモンテネグロの新聞 *Глас Црногорца*, 11. октября 1908., стр.1 に記録がある。

⁵⁷ 中島国彦と宗像和重、源貴志「新発見・二葉亭四迷ロシア滞在期の日記2冊——その紹介と翻刻」『早稲田大学図書館紀要』63号、2016年、31-32頁。翻刻者による補足および本文の一部ではないと推測される数字は引用者の責任で略した。

⁵⁸ 同、43, 46, 56-57, 60, 63頁。とはいえこの日記は個人の備忘録であり、他の国名表記でも揺れが大きいことは留意すべきだろう。たとえばセルビアは「セルウキア」「塞爾維」「Serbia」「Servia」などと表記される。同、23, 34, 36, 40頁。セルビアの表記に関しては、拙稿「明治・大正期の外国地名表記を訪ねて」18-19頁も参照。

⁵⁹ 藤本光「明治35年『外国地名及人名ノ稱へ方及書き方』の公表について」『東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学』23号、1971年、129-130, 132頁。

⁶⁰ 坪井久馬三ほか「外国地名及人名書き方及稱へ方調査表」『地學雜誌』14巻12号、1902年、1頁。冊子版として、稻川竹五郎編『外国地名及人名書き方及稱へ方調査表』東京地學協會、1902年があるが、本稿では『地学雜誌』から引用した。

⁶¹ 同、29頁。

文字 Ц, Ч, Ш ニハ Z, Tch, Shch ヲ用フ」⁶²とあるので、Tsrnagora とは Crna Gora のセルビア語キリル文字表記 Црна Гора⁶³を転写した結果ではなく(Црна Гора は凡例に従って転写すると「Zrna Gora」になるはずである)、典拠にしたラテン文字文献においてそのように表記されていたのだと考えられる⁶⁴。

モンテネグロは、先述のように西欧諸語では Montenegro と呼ばれる。しかし欧米でも、現地では自国を Crna Gora と呼ぶという知識は共有されており、モンテネグロを解説した文章ではしばしば「国名は『黒い山』を意味し、現地語では『ツルナ・ゴーラ』と呼ぶ」というような説明がある。ところが幕末から明治期にかけての西欧諸語文献での「ツルナ・ゴーラ」の表記は揺れており、現在の綴字に近い“Crnagora”⁶⁵と書かれることもあれば、“Tzrnagora”⁶⁶や“Tsernagora”⁶⁷、“Tzernegóra”⁶⁸、“Tserna Gora”⁶⁹、さらには“Czernagora”⁷⁰のように表記されることもあった。

これらの表記揺れは、c をツァ行の音で読むことが西欧諸語の話者にとっては困難であり、ツ

⁶² 同、3頁。なお、この転写法が整合性を欠いていることは、同時代の学者にも指摘されていた。地理学者の小川琢治は、「露語の Ц Ч に ts ch を用ひずして Ш Ш のみ shch を用ひたる」点を「奇観」と評したほか、ヤ行の表記に j の字を用いていることを「其國固有の羅馬字綴り方に非ざるトランスリテレーションの場合に此の如く英佛獨の混合雜出するは獨り檢索の不便に非ずして、従ひて、亂雜なる綴字法を我地理學の教科書中に導くの虞なしとせず」と批判している。小川琢治「外國地名及人名書き方及稱へ方調査表を讀みて」『地學雜誌』15卷1号、1903年、89-90, 92頁。

⁶³ 時代ごとの綴字法の揺れも考慮する必要があるが、Црна Гора に関しては少なくとも19世紀後半以降にはさして変わっていない。たとえばヴーク・カラジチ (Vuk Karadžić) の辞書では「Црна гора」と綴られているし、1855年にノヴィ・サド (Novi Sad) で出版された法律書では、表紙で現在と同じ「Црна Гора」、本文では「Црнагора」となっている(Црне Горе は Црна Гора の生格形)。Вук Стефановић, Српски рјечник, истолкован њемачким и латинским ријечма (ベチ, 1818), 頁.890; Vuk Steph. Karadžić, Deutsch-serbisches Wörterbuch (Wien, 1872), S.118; Законикъ Даниїла Првогъ княза и господара слободне Црне Горе и Брдахъ: установлєнь 1855 године на Цетинь (Нови Сад, 1855), 頁.4.

⁶⁴ 本稿では坪井らが依拠した洋書を特定することはできなかった。ただし、ツァ行を表す ц の転写に ts ではなく z を用いていることから、おそらくドイツ語の著書を参照したものと推測しうる。

⁶⁵ Bernhard Schwarz, *Montenegro: Schilderung einer Reise durch das Innere nebst Entwurf einer Geographie des Landes*, zweite Ausgabe (Leipzig, 1888), S.357; William Miller, *The Balkans: Roumania, Bulgaria, Servia and Montenegro* (London, 1899), p.354.

⁶⁶ W. Denton, *Montenegro: Its People and Their History* (London, 1877), p.10. 斜体は原文ママ。

⁶⁷ George M. Towle, *A Brief History of Montenegro* (Boston, 1877), p.5.

⁶⁸ Travers Twiss, *The Law of Nations Considered as Independent Political Communities: On the Right and Duties of Nations in Time of Peace* (Oxford – London, 1861), p.107.

⁶⁹ A. Ubicini, *Les Serbes de Turquie: Études historiques, statistiques et politiques sur la principauté de Serbie, le Montenegro et les pays serbes adjacents* (Paris, 1865), p.142.

⁷⁰ Arthur J. Evans, *Illyrian Letters: A Revised Selection of Correspondence from the Illyrian Provinces of Bosnia, Herzegovina, Montenegro, Albania, Dalmatia, Croatia, and Slavonia, Addressed to the 'Manchester Guardian' during the Year 1877* (London, 1878), p.166.

ァ行の表記としては ts や tz の方がわかりやすいと思われたことが理由であろうと推測する(また当時、セルビア語キリル文字のラテン文字転写の厳密な規範が普及していなかったことも一因として挙げられるだろう)⁷¹。坪井らが「顕著な別名」として「Tsmagora」表記を採用した背景には、このような西欧諸語における表記揺れの存在があるのである。

「調査表」における記述から、「Tsmagora」が現地語での呼称であるという認識は調査者たちの間に存在したことがわかる。しかし同時に、それを日本語表記に取り入れようという考えは存在していなかったのだ⁷²。

5. おわりに

本稿での検討を通じて、以下のことがわかった。幕末・明治期におけるモンテネグロの国名表記は、一貫して西欧諸語での呼称である Montenegro に基づいたものだったが、中国語を経由して漢字表記するかオランダ語から直接導入して仮名文字で表記するか、そしてどの文字を当てるかという点で揺れがみられた。カタカナ表記は徐々に「モンテネグロ」への統一が進行したものの、漢字表記の統一は最後までなされなかったといつてよい。

一旦は西欧諸語に由来する音訳表記が慣用となったモンテネグロだが、バルカン戦争の勃発とともに、意識である「黒山国」という表記が用いられるようになっていく。バルカン戦争から第一次世界大戦期にかけての国名表記については別稿で議論したい。

The Writing of Toponym “Montenegro” in Late Tokugawa and Meiji Japan

Nakazawa Takuya

Abstract: This article studies how the toponym “Montenegro” was written in Japanese in the later half of 19th and early 20th centuries. First information on Montenegro in Japan came through Chinese during Ansei era (1854–1860). Thereafter, until the Meiji period, toponym “Montenegro” was mainly written in Chinese characters phonetically (e. g. 蒙的尼). After the Meiji Restoration, Montenegro was also written in kana phonetically as *Monteneguro* (e. g. モンテ子グロ). In 1902, *Monteneguro* was introduced in kana based on the guideline announced by the Ministry of Education, and since then, kana has been widely used.

Keywords: Montenegro, translation of foreign toponyms, Japanese-Montenegrin relationship

⁷¹ キリル文字を用いる他の言語にはしばしば複数のラテン文字への転写法が存在し、転写法によっては ц を ts や z で転写することもありうるが、現代セルビア語のキリル文字はラテン文字と一対一で対応するため、 ц を c 以外の文字で転写するのは誤りとなる。

⁷² なお『地学雑誌』は、これ以降一貫して「モンテネグロ」と表記している。『地学雑誌』21巻8号、1909年、582頁；『地学雑誌』22巻9号、1910年、705頁。

『或問』投稿規定

- 投稿資格は、近代東西言語文化接触研究会会員（入会は内田、又は沈まで）。
- 投稿論文は、原則として未公開の完全原稿とし、電子テキストとプリントアウトの両方を提出する。原稿は返却しない。
- 執筆者による校正は、二校までとする。
- 投稿論文は、本誌掲載後、他の論文集等の出版物への投稿を妨げない。
- 原稿作成に当たって、『或問』「執筆要領」を厳守する。
- 原稿料は支払わないが、雑誌を格安価格で提供する。

『或問』執筆要領

1. 使用言語は、日本語、英語、中国語とする。
2. 字数は、16,000字（400字詰め原稿用紙40枚）までとする。
3. 簡単な要旨（原稿と異なる言語による）を付する。
4. 投稿は、所定のフォーマットを用い、表などは極力避ける。フォーマットは、沈国威までご連絡ください。
5. テンプレートを使用しない場合、テキストファイルの形で提出する。
6. 論文中に中国語などを混在させる場合、Windowsは、微軟Pinyin2.0（簡体字）、微軟新注音（繁体字）を用いること。
7. 注は、脚注を用い、文章の行中に（注1）のように番号を付ける。
8. 参考文献は、下記の体裁で脚注に付けるか、或いは文末に一括して明示すること。

（単行本）

或問太郎、『西学東漸の研究』、大阪：しずみ書房、2000年10-20頁

Bennett, Adrian A. *John Fryer: The Introduction of Western Science and Technology into Nineteenth-century China*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press 1967.

（論文）

或問花子、「東学西漸の研究」、『或問』第1号、2000年2-15頁

Fryer, John. "Scientific Terminology: Present Discrepancies and Means of Securing Uniformity." *Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China Held at Shanghai, May 7-20, 1890*, pp. 531-549.

9. 本文や注の中で、文献に言及するときには、或問太郎（2000:2-15）のように指示する。同一著者による同年の論著は、2000a、2000bのように区別する。

内田慶市 (u_keiichi@mac.com)

沈 国威 (shkky@kansai-u.ac.jp)